



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



日本の家庭料理講習会ご報告

小川 久美子

令和5年10月14日(土)、日口交流協会主催の日本料理教室が開かれました。今回のメニューは、山形の郷土料理の芋煮、九州の特産品を使った小松菜の柚子胡椒和え、厚焼き玉子でした。芋煮と小松菜の柚子胡椒和えは、身近にある食材ながら作ったことも食べたこともなかったので、私もとても楽しみにしていました。

午前9時半頃、会場には準備をする小野田先生と助手の方、千葉副会長、その他の日本人参加者が5~6名、ロシア大使館の方々が13名ほど集まっていました。調理台の上には、食材と調理器具が準備されています。日本人とロシア人混合の5~6名のグループに分かれて、早速調理が始まりました。

まず、小野田先生が説明を交えてお手本を示し、それに従って調理をしていきます。一緒に参加した従姉妹は、ロシア語が分からないと最初は不安がっていましたが、大使館の方々が積極的に調理に関わる様子や、ユーモアを交えてコミュニケーションを取ろうとくださる姿勢に、すぐに打ち解け、英語や日本語を交えながら和やかに交流を楽しんでいました。

最初に取り掛かったのは芋煮でした。ロシアの方々には、牛蒡とコンニャクの食材に興味を持たれていました。牛蒡のささがきを、ロシアの方は鉛筆を削るのと同じだと言って、上手にこなしていました。残念だったのは、コンニャクについて、コンニャク芋の根から作られたものとしか説明ができなかったことです。もう少し知識があれば、より深く日本の食文化を知ってもらえたのと思いました。

小松菜の柚子胡椒和えは、とても気に入られていました。柚子胡椒の辛味が効いていたので、おい塩なしで味を決められました。ごま油と柚子胡椒の組み合わせは、香ばしくて爽やかな味わ



いでした。

小野田先生が厚焼き玉子の説明を始めると、ロシアの方々は一斉に集まり、カメラを構え始めました。前の2つの料理に輪をかけた熱心さで、先生の動きを詳細に観察し、ロシア語で手順に自分なりの解釈を加えながら、ビデオに収める姿がありました。日本の一般家庭で日常的に作られる厚焼き玉子に対する関心がとても高い様子を、私は不思議な気持ちで見えていました。後で千葉副会長より、厚焼き玉子はロシア側からのリクエストだと聞き、小野田先生から、どうしてあんなに厚く焼けるのか、外国の方々には不思議に思うらしい、という話を伺い、あの熱意にも理由があるのだと納得しました。

いよいよ試食が始まると、なかなか味が決まらなかった芋煮は、よい具合に味が染み込んでいました。小松菜の柚子胡椒和えはやはり人気で、「サラダ」が好き、と話しているのが聞こえました。ロシアの方々が率先して作った厚焼き玉子は、少し焦げ気味でしたが、きれいに仕上がっていました。

初対面の方が多く、言葉もおぼつかない交流でしたが、調理をするというひとつの目標に一緒に取り組む中で、ふんわりとした連帯感が生まれるのを感じました。

*奥様のアナスタシア様と共に長年お世話になった通商代表部のパブレンコご夫妻が帰国されることとなりました。

関係者各位

平素より大変お世話になっております。小生は本年11月8日をもって、任期満了に伴って、在日ロシア連邦通商代表を離任し、帰国することとなります。

6年間の公務となりましたが、公私共に一方ならぬご支援・ご協力を賜り心より御礼申し上げます。日本での公務は、忘れがたい貴重な経験となりました。公務中、コロナ禍との闘いもあり、日ロ経済関係の冷え込みもありますが、日本とロシアが隣国同士であることから、何があってもいずれか正常に戻ると確信しております。小生も帰国し、今後とも日ロビジネス交流に邁進する決意であります。直接のご挨拶が叶わなかった皆様には、略儀ながらメールでのご挨拶となりますこと、ご容赦頂ければ幸いです。

末筆ではございますが、皆様の益々のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。引き続きよろしくお願い申し上げます。在日ロシア連邦通商代表部 通商代表パブレンコ・ピョートル

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を行っています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。野口久美子氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

お知らせ

●講演会「中ロ国境問題の解決の分析他」

日時: 2023年11月26日(日) 15:00~17:00

会費: 一般2000円、会員・学生・外国人1500円

場所: JR新橋駅生涯学習センター「ばるーん」303学習室

講師: 井出敬二氏(立教大学大学院兼任講師)

*講演後に懇親会をします(会費3500円予定)。

●新年用フラワーアレンジ講習会

日時: 2023年11月25日(土) 9:00~12:00

講師: 榎本江美子 会費: 2000円

●茶道体験交流

日時: 12月10日(日) 9:00~12:00 田町「リーブラ」和室

●日帰りバス旅行

日時: 2023年11月6日(月) *会員又は会員の紹介者のみ。

事務局: Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

ウズベキスタン便り

フェルガナ州の学校改革

後藤 三加子

ウズベキスタン共和国では、「進んだ外国の教育制度を取り入れた教育改革を進める」との大統領の方針を受け、フェルガナ州では日本の教育制度を取り入れた教育改革に取り組んでいる。

私は、30年余りの教員生活と20年余りのウズベキスタンのNORIKO学級でのボランティア経験から、5月からフェルガナ州知事の教育アドバイザーとしての生活を始めた。日本では、有数のブラック企業と名高く、教員を希望する人が減り人手不足が騒がれている。ようやく文部科学省も力を入れて教員の働き方改革に取り組もうとしている。教育現場に目を向けると、不登校やいじめ、体罰など問題は山積みとなり対応が続けられている。

ウズベキスタンの教育を考える人々が何を欲し、どのような考えをもって日本の教育を取り入れたいと考え、この取り組みを進めようと考えているのかが興味深く、この仕事をするに決めた。始めてみると、州知事はもちろん、教育行政の担当者や校長先生方と直接話をする機会が得られた。海外の教育やPISAの結果、数学・科学などの教科ワールドオリピックの結果などはもちろん、教育界での取り組みについてとてもよく勉強している。実際に日本を訪れてもいる。そんな人々が、日本の教育



の中からウズベキスタンの教育に取り入れたいと考えているのは何なのか聞いてみた。日本人の勤勉さ、他人を思う心、ゴミのない清潔な街づくり、科学技術の高さ、資源のない日本が経済発展を遂げたことなどから、それを育てた日本の教育をと考えているようである。今となっては過去のものともなりつつあるのではと思うものもある。しかし、ウズベクの人々が日本人をイメージしての教育を求めていることが分かった。

州知事や教育長をはじめとする教育関係者と話し合い、研修などを重ね、実際に9月の新年度から始めた取り組みは、道德教育の導入。生徒たちが自分の教室を自分達で掃除すること。食育や給食の導入。職員室を設け、教材や資料の共有と生徒理解のための交流の場を作ること。ICTを活用した授業改善やそのための研修の実施。キャリア教育を視野に入れた放課後のクラブ活動の導入な

どである。短時間でいろいろな準備が行われ、学校はもちろん行政や地域の協力を得て、日本では考えられないスピードでいろいろなものが用意・設置され、改革が進められている。

生徒はもちろん先生方にとっても負担の少ない、有意義な改革になるよう協力していくつもりだ。(フェルガナ州 教育アドバイザー)

<新刊紹介>

それからの帝国

佐藤優 著(光文社) 1,870円(税込)

9月の週末、久しぶりに大きな書店で本を眺めてみようとして寄った丸の内の丸善で、ある自伝的ノンフィクションが目にとまった。『それからの帝国』— ベストセラー作家、“知の巨人”とも言われる佐藤優氏の最新刊のようだ。それなりに分厚いが、会話形式での展開も多く読みづらい感じはしない。少し目を通すと、ソ連時代の駆け出し外交官の頃のエピソードなども面白く興味深かった。また、本の帯には著者あとがきが引用され「現在、プーチンの戦争を支持している知識人のほとんどがゴルバチョフ・ソ連共産党書記長のペレストロイカを支持した人々とエリツィン・ロシア大統領の改革を支持した人々によって構成されている。ロシアの「謎」(すなわちロシア知識人の内在的論理)を理解するためにも本書は有益と思う」とあり、私の注意を惹いたのだと思う。

この本は作者の自伝的なノンフィクション小説で、その友人であり主人公のサーシャ(アレクサンドル・カザコフ氏)との交友を軸とした形で展開される。モスクワ大学哲学部で同窓の友サーシャは早熟な天才肌の活動家で、佐藤氏と飲み歩き議論を交わす親友であった。彼は共産主義が力を失ったソ連は自壊するほかないと予見して佐藤氏を驚かせ、ソ連体制の打破を目指して大学を中退し故郷ラトビアの独立運動に身を投じる。ほどなくソ連は崩壊する。この激動の時代を経て、二人はそれぞれに活躍するが数奇な運命を辿ることにな

り、音信不通となるのである。

その後二人は2012年、日本で再会する。佐藤氏はすでに外務省を辞し、論壇で活躍する作家として2006年に上梓した小説『自壊する帝国』で、崩壊するソ連の様子を、氏の知人でもあった反体制派や政界のエリート達を目線と人生も借りながら描いていた。その中でサーシャは主要な主人公の一人であった。サーシャは現在も政治に関わる仕事をしているようだ。

本作の後半では、2012年の再会時に2人が交わした会話、交友の様子が描かれる。訪日したサーシャが最初に希望した訪問地として、東京の靖国神社と、被爆地・広島を選んだのは興味深い。読み進むとこの点に関心を寄せるロシアの知識層は実際多いのではないかなと思わせるものがあった。

また、サーシャが学生時代からロシアを統合する原理を探求する姿も学生時代から変わっていないようだが、その姿は今のロシアそのものではないか、と思えてくるのである。

地理的にも広大で多民族の社会を包摂するロシアの課題は、日本人には実感として捉えにくいスケールかもしれないが、それもロシアの魅力だと思う。不幸にもウクライナ戦争に至ったロシアの「内在的論理」とは何か。サーシャの思考をたどったとき、少なくともその一端がたしかに垣間見えてくる気がした。

本書が発刊されたのは本年7月で、現在のウクライナ侵攻に対する評価はサーシャと佐藤氏では対立するとの事だ。しかし二人の友情は変わらない。(江本大輝)

孫が伝える帝政時代最後の在函館ロシア領事 E. レベデフ

倉田 有佳

10月初旬、帝政時代最後の在函館ロシア領事の孫が函館にやって来た。現在70代半ばのグレック氏の祖父エヴゲーニ・レベデフ（1879年生）のことは、2014年発行『日露異色の群像30』所収の拙稿にまとめた。だが今回、アメリカからやって来た孫との出会いにより、貴重な新情報が加わった。

レベデフ領事一家が、1912年から暮らしていた函館を後にしたのは、日ソ基本条約が締結され、日本政府がソヴィエト政権を正式に承認した1カ月後（1925年2月）のことだった。行先は、メキシコとも、シアトル大学で学ぶ長男ユーリのいるアメリカとも言われ、曖昧だった。日魯漁業株式会社の平塚常次郎社長が、後年アメリカでレベデフの子どもに会った、と娘の千鶴子さんが回想（1990年）しているが、詳細は不明だった。

それが今回、一家はまずメキシコに向かい、祖父以外はアメリカに入国したことが判明した。グレック氏によれば、ソヴィエト新政権との関係を配慮したアメリカ政府は、ロシア帝国時代の外交官の入国を認めなかったため、祖父は一人メキシコに残り、ガソリンスタンドで働くなどしていた。最晩年にアメリカ移住が許可された。

函館時代は日本人嫌いで有名だったレベデフ領事だが、その原因は「日露戦争」にあったとされる。戦争勃発直後、東洋学院（極東連邦総合大学の前身）の4年生6名が通訳として満洲に派遣される。その一人だったレベデフは、ステッセル将軍付きの日本



1916年8月函館（グレック氏提供写真。領事館のテラス下で。右端の少年がユーリ）

語通訳となる。旅順港外で日本海軍の機雷によって爆沈、マカーロフ提督が戦死したことで知られる巡洋艦「ポルタヴァ」に乗り込む。レベデフが命拾いしたのは、事件前夜、本船に戻れず埠頭で夜を明かしたためだった。旅順陥落、「水師營の会見」という大舞台にも居合わせた（開城談判は英語通訳が行ったが）。

一族の間では、ステッセル将軍から一緒に帰ろうと誘われ、レベデフはロシアに帰国したと伝わっている。「宣誓解放」を行い帰国したステッセル将軍と行動を共にしたということは、レベデフに日本国内の捕虜収容所体験がなかった証明にもなる。

グレック氏とのやり取りで興味深かったのは、1900年に東洋学院に入学した際のレベデフの証明写真を筆者が見せた時の反応だ。「笑っていない。ロシア人は笑わないのか？」

グレック氏は、父ユーリ（1906年東京生）とアメリカ生まれの母（ロシア革命後に渡米したロシア人を父とする）との間に生まれた。祖父は既にこの世を去っており、写真の祖父に笑った姿がないことを不思議に思ってきた、というのである。

二十歳過ぎから学生としてアメリカ暮らしを始めた父は「厳格だがよく笑う人」。自身はアメリカ生まれのアメリカ人。帝政時代最後の外交官だった祖父の「むやみに笑わない」ロシア人気質は、子や孫に受け継がれなかった。これまた「新発見」だった。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

ハリコフーモスクワ（Ⅱ）

浜野 道博

ロシアでは19世紀半ばから鉄道業が急速に発達し、ハリコフをかなめとしたウクライナ東北部も例外ではなかった。この地域の鉄道網はロシア帝国、その後のソ連邦でも首都からの見立てで

「南部鉄道（管区）」と呼ばれた。ウクライナが独立したのちも引き続き「南部鉄道」（下記社章参照）を名乗り、鉄道事業者として「モスクワ管区」「レニングラード管区」について旧ソ連圏では第三位の規模を誇っている。ハリコフ駅には優れた「南部鉄道歴史鉄道技術博物館」があり鉄道マニアには一見の価値がある。



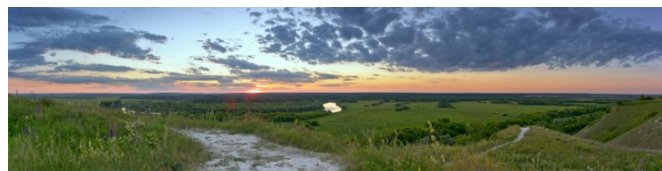
1853-1856年のクリミア戦争でオスマン帝国、英仏、サルディニアの連合軍に敗北したロシアは、兵員や軍事物資の輸送を徒歩や馬匹に頼ったためウクライナの春と秋の泥濘に苦しめられ敗戦の一因ともなった。その苦い経験からロシア内地からクリミアのセバストーポリまでの鉄道建設が戦後すぐ建議された。その幹線に連なるモスクワ方面からハリコフまでの鉄道が何度も建設計画が取り沙汰されては資金が集まらず先送りになっていたところ、クリミア戦争の敗北を奇貨として着工にこぎつけ、まずクルスクーハリコフ間が1869年に開通し、1874年にはセバストーポリまで延伸された。¹

南部鉄道はそのうちウクライナの穀物や石炭をロシアに運び出す大動脈となり、ボリシェビキ政権によるウクライナ支配のツールとして大きな役割を果たすことになる。

ウクライナは歴史的な母胎であるヘトマン国家が1654年にロシアの保護下に入ってから1991年のソ連邦崩壊まで何度もロシアか

らの離脱を企てた。この無理な接ぎ木にも似た相性の悪さに、はたと思い至る場所がある。

ハリコフから北東へ300km行くとロシア黒土地帯の中心地ボロネジに至り、そこから真南に80km下るとДивногорье（ディヴノゴリエ）に着く。標高差100mほどの白亜（チョーク）の美しい丘で自然保護区に指定されている。この丘に立つと眼前に湾曲したドン河が悠然と流れ、その先にはかつて遊牧民族が跋扈したステップ（草原）が茫々と広がる。（写真）



ロシアが北方のノブゴロド、ウラジーミル、モスクワなどの集まりから、モスクワが抜け出てひとり興隆する時代、ウクライナ人の祖先はこのステップのはるかかなたで400年間ロシアとは別の歴史を生きた。ハリコフはやはりウクライナであって「ロシア南部」ではない。

¹ 日本の鉄道開業は1872年である。ロシアではその後兵員や軍事物資の輸送をもっぱらに鉄道に頼ることになり、今次ウクライナ戦争でロシア軍は占領地の鉄道輸送の拠点をウクライナ軍に攻撃され兵站到大きな支障をきたしている。

*9月号「日口交流」で著者の名前を誤って道弘と表記しました。お詫びして訂正いたします。（編集部）

野口芳雄氏/陽一氏の思い出(その5)

畔上 明

「日本海貿易」が消滅してしまったあと様々な新天地で活動していたスタッフにとって、会社の同窓会が幾度か開催された時には特別な感慨を抱きながら馳せ参じたものです。

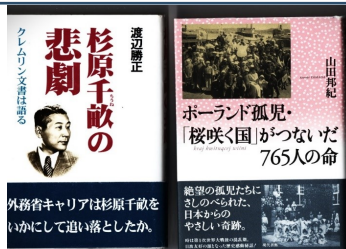
ソ連邦崩壊後の同窓会に出席した時には九十代のご高齢ながら変わらぬ優しい表情でいらっしゃる野口芳雄社長が参加されたことに皆は驚きと共に心より喜び、敬愛の思いを伝えあったものでした。

2007年11月17日に開かれた同窓会をもって最後の集いとなりました。幹事役のD氏もこの世を去り、年を追うごとに鬼籍に入られた方々を指折り数えていくことで歳月の経過を感じざるを得ません。

野口芳雄氏は1998年に逝去されたのですが、それから七年経った2005年『野口メモ』なる外交機密書が公開されました。日ソ国交正常化交渉が行われた1956年10月フルシチョフ第一書記、ブルガーニン首相、鳩山一郎首相、河野一郎農林大臣の十一回に及ぶ会談の通訳に当たった野口氏が息詰まる状況を克明に記録に残し、河野一郎秘書であった石川達男氏が半世紀を経て発表したことで、歴史的転換となる内部資料が日口間の外交裏事情を知る手掛かりとして明らかになりました。

なお2006年大正出版発行 渡辺勝正著『杉原千畝の悲劇』の中には、「モスクワ時代の杉原千畝」について現地駐在員たちが語るページがあり、当時日本を代表するロシア語のできる三人を「ロシア語の三達人」と呼んでいたとのことで杉原千畝、野口芳雄、高橋要の三氏が挙げられていました。

2011年現代書館発行 山田邦紀著『ポーランド孤児・「桜咲く国」がつかないだ765人の命』では「極東青年会と野口芳



雄」に一章が捧げられています。18世紀末ポーランドという国はロシア、プロイセン、オーストリアによって分割され消滅してしまうのですが独立運動に尽力したポーランド人はシベリアへ流刑の身となり、その末裔である孤児たちが1920-22年日本赤十字の救済事業によってシベリアから日本経

由のルートで故国帰還が実現出来たという歴史があります。ポーランドに帰国した孤児たちは日本の恩を忘れまいと極東青年会という親善団体を組織し集まりを持つのですが、1936-38年在ポーランド日本公使館勤務であった野口芳雄氏がその青年たちの活動を熱心に支援し深い交流を重ねていくうちに、如何に慕われていたか、イエジ・ストシャウコフスキをはじめとする会幹部から野口氏帰国時に再度ポーランドに戻ってきてほしいという嘆願がなされたのでした。その陳情書は外交史料に残されているのです。野口芳雄氏が外務省留学生として日露協会学校(のちのハルビン学院)へ渡る前、4年間に亘って敦賀商業でロシア語を学んでいた時期、丁度ウラジヴォストークから敦賀にやって来たポーランド孤児たちを出迎えてお世話をしたことからの後の交流へとつながっていったのでした。

それまで私の知る以上のはるかにスケールの大きな野口氏を再認識することとなった今日、もしも五十年前の昔に帰ることが出来たならば、野口親子からもっともお話しを直接伺っておくべきであった、そして現在の困難な日口関係に向き合う力を身につけておく覚悟が得られたかもしれない、と夢想してしまうのです。



着物体験交流(大使館編・2~4)

千葉 麻里

今年は大使館のタチヤーナさんのお陰で充実した文化交流ができた。着物については特に関心が高く、ご家族で記念写真を撮られる方が多かった。第2回目の7月12日

(火)に38名、7月31日(火)に35名、9月18日(月)に32名の方が体験された。

毎回、大使館のホールには軽食やお茶菓子、飲み物が用意され、いつでも取れるようになっていたので、着付けの合間に水分や糖分補給が十分にできてとても楽だった。3つのダンボールやケースに入れられた着物も、車で運んで頂いたので余分に用意できた。以前、山岸常任理事から寄付してもらっていた男子用の華やかな色の袴織や、渡邊理事からの優しい色の振袖は評判がよく引っ張りだこだった。

3回目と4回目の間があったので一度持ち帰り、ほどけた刺繍や身八つ口のほつれを直し、着物に風を通して4回目にも備えることができた。大勢の方に着てもらって、着物もさぞ満足していることだろう。毎回、4名の着付けの先生方と助手1名で担当したが、色白の美しい女性と少女、体格のいい男性と男の子たちは着せ甲斐のあるモデルだったようだ。



撮影用の小物も毎回増えてきて、番傘や扇子、刀でポーズをとって楽しんでおられたのは、見ている私たちも楽しかった。来年もまた皆さんの思い出作りに貢献できれば、と思う。お土産物の化繊の着物もどきでなく、本物の着物を着ていただくことは日本文化の一つを知っていただくことでもある。海外での文化交流の際に、日本人が誤った着物知識を伝えている事実気づくことが時々ある。が、昨今は優れた和文化に関心を寄せている外国人が多い中、少なくとも恥をかかないようにしてもらいたいものだ。

暑い中を長時間着付けを手伝ってくださった先生方、着替えのための敷物や補正用タオルの準備、様々な配慮をしてくださったタチヤーナさんと大使館のシェフ、着物を運んでくれたり駅まで送迎してくれた大使館の運転手さん方に心から感謝します。(副会長)

追悼

元当協会常任理事益田元一様が9月16日にお亡くなりになりました。これまでのご活躍に感謝し、哀悼の意を捧げます。

合掌 会長 服部文男

*益田元一氏は、懇話会で活躍した後にアウドドア一部会を立ち上げ長きにわたり牽引してこられました。ご冥福をお祈りいたします。